

目次

国語 Vol.2

| | |
|----------------|-----|
| 読解編 第1部 | |
| 1 文学的文章の読解 | 4 |
| 2 文学的文章 | 12 |
| 3 文学的文章 | 18 |
| 4 文学的文章 | 24 |
| 5 文学的文章 | 30 |
| 6 文学的文章 | 36 |
| 7 文学的文章 | 42 |
| 8 文学的文章 | 48 |
| 9 文学的文章 | 54 |
| 10 文学的文章 | 60 |
| 11 文学的文章 | 66 |
| 読解編 第2部 | |
| 12 説明的文章の読解 | 72 |
| 13 説明的文章 | 78 |
| 14 説明的文章 | 84 |
| 15 説明的文章 | 90 |
| 読解編 第3部 | |
| 16 説明的文章 | 96 |
| 17 説明的文章 | 102 |
| 18 説明的文章 | 108 |
| 19 説明的文章 | 114 |
| 20 説明的文章 | 120 |
| 21 説明的文章 | 126 |
| 22 説明的文章 | 132 |
| 読解編 第4部 | |
| 23 韻文の読解 | 138 |
| 24 韻文(1) (詩①) | 144 |
| 25 韻文(2) (詩②) | 148 |
| 26 韻文(3) (短歌) | 152 |
| 27 韻文(4) (俳句) | 156 |
| 28 古典の読解 | 160 |
| 29 古典(1) | 164 |

30 古典 (2) 168

31 古典 (3) 172

言語・知識事項編 第1部

32 文法の学習 (1) (品詞の種類・活用のある自立語) 176

33 文法 (1) (品詞の種類・活用のある自立語) 180

34 文法の学習 (2) (活用のない自立語) 184

35 文法 (2) (活用のない自立語) 188

36 文法の学習 (3) (付属語) 192

37 文法 (3) (付属語) 196

言語・知識事項編 第2部

38 表現・記述の学習 200

39 表現・記述 (1) 204

40 表現・記述 (2) 208

言語・知識事項編 第3部

41 漢字・語句の学習 212

42 漢字・語句 (1) 216

43 漢字・語句 (2) 220

付録

用言・助動詞活用表 224

文学的文章の読解

例題 I

◆ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学習日 月 日



15

10

5



45

40

35

30

25

20

- (6) **細部の読み取り** 「老婢」の境遇を示す部分を、本文中から二十文字以内で書き抜いて答えなさい。

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

- (7) **心情の変化をつかむ** 「老婢」の心情の変化を表したものとして最も

適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 怒り↓自信↓気後れ↓当惑↓不人情↓懐柔
 イ 怒り↓気後れ↓不人情↓安心↓奮起↓懐柔
 ウ 怒り↓不安↓安心↓当惑↓憤慨↓懐柔
 エ 怒り↓動揺↓当惑↓奮起↓憤慨↓懐柔
 オ 怒り↓動揺↓不安↓憎悪↓安心↓懐柔

解法の解説

- (1) **設定をつかむ** 小説を読解する上で、登場人物の置かれた立場、状況を把握することは、その心情を考える際にも大事になることです。同じ出来

事に直面しても、立場が違えば、おのずとそれに対する考え、気持ちは異なってくるはずです。文章の細部まで読み取り、登場人物がどのような設定のもとに置かれているかは、常に頭に入れておきましょう。

本文の主な登場人物は、「私」、「まき（老婢）」、「ひろ子」の三人です。「私」の暮らしは、まず、2・3行目「書きものの気を散らせるので」から、考えることができます。しかも、8・9行目には「久し振りにあたる明るい陽の光」とありますから、かなりの長時間部屋に閉じこもって書きものをし

ているということがわかり、書きものに没頭する「私」の様子が読み取れます。また、まきの「『まあ、奥さま、』」（45～47行目）や、「私」の「これより上へ短くは摘み取るまいよ。』（55・56行目）」という会話の言葉遣いから、「まき」が「私」の家のお手伝いであるということがわかり、ここから「私」が、家事は「まき」にまかせているという状況を読み取ることができます。

- (2) **人物をつかむ** 登場人物の会話や態度から、その人物像をつかむという

ことも小説を読解する上では不可欠です。文章中の細かい描写も見落とすことなく、自分の頭の中で人物像を作り上げることができれば、その人物の考えや気持ちを知ることが容易になるはずです。

ここでは、「葉茶屋の少女ひろ子」の、「まき」に対してとっている態度を考えなくてはなりません。「もうだいたい返答返しされて多少自信を失ったまきはしどろもどろの調子である」（18・19行目）という「まき」の様子や、「この子たち口減らずといったら——」（33行目）、「おまえなど女弁士にでもおなり。」（36行目）という「まき」の「ひろ子」に対する会話から、大人の「まき」をすっかりやり込めてしまっている「ひろ子」の姿が浮かび上がります。ここから「ひろ子」の「まき」に対する口調を考えてみましょう。

- (3) **状況をつかむ** 描かれている場面がどのようなものか、生々しく頭に

浮かべることができるよう、細部まで注意深く読み、今何が起こっているかをよく考えてみてください。

ここは、「私」が門の外での「まき」と「ひろ子」のやりとりを聞いて、その様子を想像している場面です。それだけに門の外の様子がややわかりづらいかもかもしれませんが、この後の「『じゃ、この蕨の芽をちぎったのは誰だ。』（26行目）などから、「まき」は、「ひろ子」が蕨の芽を摘み取ったのだと疑い、「『うそだろ！ 両手を出してお見せ。』（17行目）」と言ったこ

とがわかります。そして、そのことばを受けた「ひろ子」の「立派に大きく両手を突き出した」(21行目)という自信に満ちた態度から、その手には蕨の芽を摘み取った跡はなかったということがわかります。この一連の場面から、当惑する「まき」の気持ちを推し量ることができはるはずで

(4) 場面をつかむ

小説の場合、場面の転換には十分に気をつけて読まなければなりません。時間的な移り変わりはもちろん、描かれている対象の変化にも注意して読むことを心がけましょう。

ここでは、最初から11行目「く聞かぬともなく聞く。」までが、「私」の描写であるのに対して、12行目「『ええええ、く』から42・43行目「く馳せ去る足音がした」までは「まき」と「ひろ子」のやりとりが描かれています。そして、43行目「やつと私はく」で、「私」が門の外へ出て、「まき」と「私」のやりとりの場面となっています。これらの場面の変化が頭に入っていれば、門の内側の「私」の様子が描かれている部分を見つけることは容易であるはずで

(5) 表現技法をつかむ

詩や小説などの文学的文章では、工夫の凝らされた独特の表現がしばしば見られます。特に、擬人法などを含めた比喩表現には注意して読まなければなりません。

ここでは、蕨の状態の比喩表現を問われていますが、まず、「私」が、むしろいらぬ状態の蕨を見ている場面と、むしろいらぬ状態の蕨を見ている場面とを見きわめることができれば、正解のことばを探すのも容易です。蕨がむしろいらぬのは門の外で、門の内にはむしろいらぬ蕨があるというところがわかれば、「門の裏側の若蕨の群はく潮の飛沫のようだ」(4〜7行目)の部分が、むしろいらぬ蕨の描写であることがわかるはずで

また、「私」が門の外へ出た後の「指したのを見ると、門の蕨はく滑稽にも見えた」(48〜50行目)がむしろいらぬ蕨の描写であることに気づくことができるでしょう。これらの部分からそれぞれ蕨をたとえた漢字一字を探してみま

(6) 細部の読み取り

文章の細部を読み取るためには、注意深く読むということは当然のことですが、大まかな話の筋を頭に入れておくことが大切です。一度通して読み、大体の流れをつかんだ上で、細かい部分を読むことが重要な手がかりを見つけるポイントとなります。

ここでは、「まき」の境遇を示す部分問われているわけですが、まず大まかな流れをつかみ、本文中で「まき」が、「老婢」(1行目他)、「老女」(35行目)、「ばあや」(44行目)と様々な表現をされていることを押さえておかなければなりません。そして、なぜ「まき」が「不人情の一言」に刺激を受けたのかを考えれば、「まき」の境遇を示す部分は見つかるはずで

(7) 心情の変化をつかむ

登場人物の心情の読み取りは、小説の読解の骨子になるといえます。その登場人物の性格や考え方、置かれている立場、状況をつかんだ上で、その場面に応じて、ぴったりとくる心情を考えましょう。文章中での「まき」の心情の動きを考えるわけですが、まず「不人情」は「まき」の心情を直接表したことばではないことに注意。また、「安心」した気持ちにもなっていないことから正解は判断できます。1行目「がみがみ叫んでいる」、18・19行目「多少自信を失ったまきはしどろもどろの調子である」、22行目「当惑したまきの表情」、25〜27行目「ちよっと間を置いて、まきは勢いづき、『くそら言えまい。』」、33・34行目「まきの憤慨している様子」、38・39行目「老婢はまた懐柔して防ぐにしくはないと気を変えた」のそれぞれにあてはまる心情を考えてみま

例題 II

◆ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。



(1) 指示語の内容をつかむ 小説や随筆などの文学的文章においても、指示

語の指し示す内容をとらえるということが、読解の基本の一つであることには変わりありません。指し示す内容は、ほとんどの場合、その指示語の前に書かれているということが頭に入っていれば、その部分を注意深く読むことによって見つけることができるはずです。

ここでの「そういう話」とは、直後に「」に比べると、辞書を読むのは」とあることから、筆者が、最初の段落で、「辞書を読む」とことと対比する形で取り上げている「読む話」、つまり、「電話帳を読む(話)」(1行目)「列車時刻表を熟読する(話)」(3・4行目)であることがわかります。この指し内容をとらえた後、設問の文の「どういう話としてまとめることができですか」について考えてみましょう。ここで筆者は、「辞書を読む」ということもあまり一般的ではないが「電話帳」や「列車時刻表」を読むのに比べれば、「辞書」を読むことは、「はるかに正統的である。むしろ常識的すぎて気がひけるくらいだ」(6・7行目)と述べています。ここから、筆者が、「そういう話」を「正統的」でないもの、非「常識的」なものにとらえていることがわかります。これにあてはまる選択肢を選びます。

このように、小説における登場人物の心情把握と同様、随筆においても筆者の思い・考えを読み取るということが、問題を解く上では特に必要とされます。

(2) 比喩表現をつかむ 文章の中において、書き手は、自分の伝えたいこ

とを、よりわかりやすく伝えるために比喩表現を用いるわけですから、その表現の意味をつかむということは、文章全体を読解する上で非常に重要なことです。

本文の筆者は、直前の「実用派はそんなところを見ることはない」という

ことを指して、「(それでは)せつかくの宝が眠ったままである」と述べています。ここから、「せつかくの宝」は、「そんなところ」の指示内容である「日常よく使われることばについている、こまかい説明」を表していると考えられます。さらに「眠ったままである」という擬人法表現の意味を合わせて考えてみると、この比喩表現が「日常よく使われていることばについている、こまかい説明」を読まないような辞書の使い方であることを述べているとわかれるはずで、では、そのような「実用派」の人の辞書の使い方が具体的に述べられている部分を本文中から見つけてみましょう。「辞書は引くものと割り切っている実用派は知らない語ばかりを相手にする」(14・15行目)の部分で、「実用派」の辞書の使い方が述べられています。この部分のことばを用いて、設問の問いかけに対応する形に直して、答えを書きます。

(3) 心情をつかむ

描かれている体験から、その体験を持った者の心情を読み取るということが、随筆の読解では不可欠です。

「昔、中学生のとき、いい気持ちだ。」(21～31行目)までの二段落では、筆者の実際の体験が述べられています。ここから、筆者の辞書に対して抱いた思いの変化を読み取りましょう。「しかたがないから英和辞書を開いてぼんやりながめていると気がまぎれる」(22・23行目)とあるように、筆者にしても最初から、辞書をおもしろいと思っただけではないことがわかります。そのような筆者の、「辞書を読むことのおもしろさ」の発見が、傍線部分では述べられています。また、前の「そのつもりになってすこしずつ読み進んで、とうとう全巻を読み終えた」(24行目)とは、筆者が、辞書の細かい部分までいいねいに読んだことを示しています。前の部分で筆者は、「それ(＝知らない語ばかりを相手にすること)では親しみもわかない道理だ」(15行目)、「そこ(＝わかり切っていると思っただけのこと)はの項をていねいに読むこと」をのみこまないと辞書とは仲良しになれない」(20行目)と述べていることに着目することができれば、辞書の全巻を読み

終えたことによって、辞書に対して「親しみがわいた」、「辞書と仲良しになった」という気持ちを、筆者が抱いたということを読み取ることができま
す。

(4) **内容をつかむ**

文章の展開・内容を押さえ、そこから、筆者の考えを読み取ることを心がけましょう。また、このような、ある部分の要旨を問われるような問題の場合、記述による解答を要求されることが多くあるので、そのような解答形式に慣れ、解答作成のコツを身につけておくということも大事なことです。

本文では、「いまは亡き辞書作りの〜」(32行目)以後で、辞書を読むことのおもしろさや、どんなところがおもしろいのが具体的に述べられています。「よその町をそぞろ歩きするのに似ていないこともない」(39・40行目)「辞書を読むのには旅の道行きの愉しさがある」(43行目)と、辞書を読むおもしろさが「旅行」のおもしろさに通じるものであると述べられている部分を見つけることができれば、それぞれの前後にある「予測を許さないところが実に嬉しい」、「思いがけないものが待ち伏せていてびっくりさせられる」の部分に目をつけることができます。ここで設問にもどると、設問では、「旅行好きな人」と「辞書を読むことの好きな人」との共通点が問われているので、「旅行」と「辞書を読むこと」の共通点である「予測ができない(思いがけないものが待ち伏せている)点」だけでは解答としては不十分です。「(予測できないところが)嬉しい」にあたる内容を書き落とさないように注意して、答えを作成します。

(5) **主題をつかむ**

随筆や小説などの文学的文章では、必ずしも主題が結論としてまとめられて最初や最後に述べられているとは限りません。本文全体を通して、主題を考えると、何を心がけましょう。

本文では、辞書を読むということについて、繰り返し述べられていますから、筆者の思いが、このことに対して向けられていることは明らかで

す。まず、本文中から、筆者の辞書を読むことに対する思いが中心的に述べられている部分を探してみましょう。「旅行好きな人なら辞書を読むのも好きになれるはずである。旅行など面倒だという不精なものにもほんやり辞書をながめているのは楽しいひまつぶしになる。つまり人間ならだれでも辞書を読む愉しみがわかるはず」(48〜51行目)という部分、そして、そのように、だれが読んでも楽しいものである辞書を読まないのは、「せっかくの宝が眠ったままである。もったいない」(17・18行目)などの部分から、みんなに辞書を読んで楽しんでほしい、楽しむべきだという、この文章を書いた筆者の思いに合っている選択肢を選びます。

随筆文は、伝えたいことを論理的に説明していくという説明文・論説文とは異なり、それを書いた筆者の個性や人柄、ものの感じ方や考え方に触れるものです。本文の場合、普通は「道具」として用いられる辞書が、実は「読み物」としておもしろいものなのだという筆者の考え方に触れるということ、この文章のおもしろさを味わうということになります。

一口に文学的文章(特に随筆の場合)と言っても、その中身は多種多様なものです。ですから、これこれのような読み方をすれば、すべての文章の読解ができるということにはなりません。とは言っても、文章を読む際の心がけとして、叙述の順序にそって話題の中心をつかむこと、文章の主題や要旨をつかむことにはやはり留意しておくべきでしょう。

文学的文章(1)

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学習日 月 日

20 15 10 5

〈今江祥智「牧歌」より〉

45 40 35 30 25

(注) ポーカー・フェイス＝無表情な顔。内心を顔色に表さないこと。

館湯＝水飴を湯に溶かし少量のニッキを加えた飲み物。

□(1) ① ② ③ に入る最も適切なことばをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ア かなり
- イ わずかに
- ウ ふわふわ
- エ のろのろ
- オ さっさと
- カ ぐったりと

| |
|---|
| ① |
| ② |
| ③ |

□(2) 線①「ちょっとぐらいのまんことには泳がれるようにならへん。洋は冷淡に言った」とありますが、洋はなぜこのような言い方をしたのですか。その理由にあたる一文を本文中から書き抜いて答えなさい。

□(3) 線②「ふたりはかわりばんこに落っこちともがきあがり、沈没、引き上げられる——のコースをくり返した」とありますが、このような「ふたり」のことを比喩を用いて表していることばを一つ、本文中から書き抜いて答えなさい。

□(4) 線③「うなずいただけで、深呼吸した」、線④「うなずくのがやっとらしかった」とありますが、それぞれが表している様子として適切なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 張り切っている様子。
- イ 相手を気づかっている様子。
- ウ 疲れ切っている様子。
- エ ふてくされている様子。
- オ 緊張している様子。
- カ 反抗的になっている様子。

| |
|---|
| ① |
| ② |
| ③ |

□(5) 線③「甘さと熱さが」

はつきりと分かった」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。
① 「**①**臓**②**腑」の**③**・**④**にはそれぞれ漢数字が入り、「体のすみずみ」という意味の四字熟語になります。この四字熟語を完成させる、
□に入る適切な漢数字を答えなさい。

| |
|---|
| ① |
| ② |
| ③ |
| ④ |

□(6) 本文の特徴について説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 劣等感
- イ 優越感
- ウ 徒労感
- エ 充実感
- オ 挫折感
- カ 爽快感

| |
|---|
| ア |
| イ |
| ウ |
| エ |
| オ |
| カ |

□(7) 本文の特徴について説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 語句の省略がリズム感を出している文章であり、努力が無駄に終わった三人の心理を描いている。
- イ 比喩が巧みな文章であり、根元少年の目を通して登場人物の微妙な心理を効果的に描いている。
- ウ 会話文を多用した文章であり、水泳の練習に懸命に打ち込む三人の心の結びつきを描いている。
- エ 方言を用いた文章であり、洋がむりやりに泳がせようとしている気持ちを巧みに描いている。

| |
|---|
| ア |
| イ |
| ウ |
| エ |

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。



15

10

5



40

35

30

25

20

□(5) —線④「不思議なこと」とありますが、この時の「わたし」にとって、具体的にどのようなことが「不思議なこと」に思えたのですか。「〜こと」という形で、四十五字以内(句読点も字数に数えます)で答えなさい。

| | | | | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | |

□(6) 【】の部分から、ふだん「わたし」が「みな子」に対してどのような気持ちをいっていることが読み取れますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 劣等感 イ 優越感
ウ 連帯感 エ 親近感

□(7) —線⑤「『大丈夫。』わたしはうなずいた」とありますが、この時の「わたし」の様子の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア みな子のおかげで蛇に対する恐怖感を克服することができ、自信に満ちあふれている様子。
イ みな子を気づかう気持ちでいっぱいになっていて、現れた蛇に対して注意が向いていない様子。
ウ 蛇を目の前にしながら意外にも落ち着いているみな子に負けまいとして平静をよそおっている様子。
エ 恐怖感を持ちながらも、自分を頼りにするみな子の気持ちに応えるために気丈にふるまおうとしている様子。

□(8) —線⑥「じぶんの足がとても遠い遠いところで蛇をめぐけて一個の小石をけとばすのをみた」とありますが、このような表現によって「わた

し」のどのような気持ちが表されていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ほんの一瞬の自分自身の行動を客観的に見ていられるほど落ち着いている気持ち。

イ 蛇にむかって石をかけた自分の行動が、自分自身でも信じられないと感じている気持ち。

ウ 自分自身の気持ちとは裏腹に、思わず石をけってしまうほど蛇を憎んでいる気持ち。

エ 遠くの蛇に自分のつけた石が命中するという偶然のできごとが奇跡のように思える気持ち。

□(9) —線⑦「嘘言ったらあ!」と、弟はそう言って笑ったのである」とありますが、弟(信次郎)が「そう言って笑った」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おそらく蛇はみな子が撃退したのだろうと考えている信次郎にとって、弱虫の姉をかばおうとするみな子の気持ちがいけなかったから。

イ あれほど蛇を恐れていた姉が蛇に石を投げられるはずがないと思っ

ている信次郎にとって、みな子の話は突拍子もないものだったから。
ウ 二人が一緒になって自分をだましていると思っ

ている信次郎にとって、みな子の思

い違いがおかしかったから。
エ 実際には石を投げたのではなく蹴ったのだということを知っている信次郎にとって、みな子の思

1 次のそれぞれの文の——線部の漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字で書いて答えなさい。

- (1) 猛然と相手に突き進む。
- (2) 相手に自分の気持ちを訴える。
- (3) 飲みこんだ水を吐き出す。
- (4) 疲れて目が充血する。
- (5) 正月に田舎に帰る。
- (6) あまりの恐ろしさに思わず身震いする。
- (7) 心なしか表情が硬い。
- (8) 学校で頭髮の検査がある。
- (9) 船がチンボツする。
- (10) 子どもをプールの浅い所へユウドウする。

2

次のそれぞれの語句を用いて、短文を作成しなさい。

- (1) 「鳥肌が立つ」
- (2) 「気が気でない」
- (11) しっかりやれとハゲます。
- (12) テアラい祝福を受ける。
- (13) かぜ一つひかないジヨウブな体。
- (14) コウフンさめやらぬ様子。
- (15) ハナれた場所に移動する。
- (16) 日よけのためにボウシをかぶる。
- (17) 風がふいて落ち葉がマウ。
- (18) 思う存分に力をハッキする。